

世界獣医師会大会 2026 東京大会 未来日記 (前編)

演題登録&参加登録が始まりました！

来年 4 月に迫った世界獣医師会大会 2026 の演題登録と参加登録がついに始まりました。ここまで来ることができたのはプログラム委員会の先生方や、実行委員として演者の皆様を世界中から探してくださった多くの先生方のおかげでして、心から感謝申し上げます。

何号か前の記事では方向性としてのプログラム内容を皆様にご紹介したところですが、今回は未来日記という形で、さらに具体的に現段階のプログラムの内容を含む本大会の様子をご紹介してみたいと思います。

(あくまで現段階の案に基づいた筆者の勝手な想定です。)

■ ■ ■ 2026 年 4 月 21 日 (火) 1 日目 快晴

日本で 31 年ぶりに開催される世界獣医師会大会に参加するため、前日入りで東京へ。会場の東京国際フォーラムは有楽町駅の目の前でかつ、東京駅から地下道で繋がっていてとても便利。京浜東北線で 30 分以内の距離に蒲田も赤羽も入るため参加者は幅広いエリアで宿をとっているようだ。大会の合間には銀座に出ることも、隣にあるビックカメラのおもちゃコーナーで子どものお土産を見繕うこともできる。タクシーで築地や豊洲に出てもよさそうだ。

開会式には皇室のご臨席があり、また、閣僚も多く参加したため会場に入るためにはセキュリティチェックを受ける必要があるなど、初めは少々物々しい雰囲気を感じたが、日本らしい、和を感じさせる舞台演出などにすぐ引き込まれて気にならなくなった。警備の関係だろうか、普段の年次大会よりも挨拶自体の数はむしろ少なく、開会式は短く濃いものと感じられた。こうした場で世界獣医師会の会長に就任する藏内会長が挨拶をしていたことは日本の獣医師として誇らしく思う。

開会式に引き続き行われた基調講演では、北海道大学のユニバーシティプロフェッサーである

喜田教授がその専門であるインフルエンザウイルスとワンヘルスについてお話され、地球環境の変化と疾病について改めて考えるよい機会になった。なお、チャット GPT に聞いてみたところ喜田教授は「ノーベル賞候補者の上位層」らしく、その日が来たら今日のことを家族に自慢したいと思う。午後には「スポーツとワンヘルス」など新しい切り口でのシンポジウムや、大動物、小動物、獣医学教育に、変わりゆく世界におけるワンヘルス、といった非常に幅広い内容のセッションが同時に開催されており、共に参加していた同僚とともにどれに参加するか非常に迷ってしまった。

夕方からはウェルカムレセプションとして、ホールで飲み物と軽食を楽しみながら参加者が自由に歓談できる機会があり、たまたま隣になったスリランカの若手研究者からアフリカ豚コレラの厳しい現状を聞くことができた。日本に侵入しないことを祈るばかりだ。

銀座で飲みなおしたい誘惑と闘いながら無事ホテルに戻り、同僚らとビールを飲みながら明日の戦略会議。結局酔っぱらって何も決まらなかったが。

■ ■ ■ 2026 年 4 月 22 日 (水) 2 日目 くもり

2 日目の午前中はいわゆる年次大会に相当する

プログラムを中心に見て回ることにした。同僚らは小動物と産業動物、さらには獣医学教育までも梯子するという。こうした楽しみ方は世界大会ならではのと感じられる。年次大会については、前回の仙台に行き損ねてしまったので東京で参加できるのが自分にはありがたい。年次大会に相当する枠での発表でありつつも、そこは国際学会らしく発表内容が即座に英語に訳されて画面に表示されるため、聴（視？）衆には海外からの方も多く見受けられた。ここまで日本の獣医療の現場に即した内容が世界に発信されることはなかなかないことと思う。技術の発展は確実に世界を小さくしていることが感じられた。ぜひ彼らには感想を聞いてみたいものだ。

午後の時間に何を聴きに行くのかは本当に迷ったが、AI とロボット手術を選択。世界獣医師会が企画するワンヘルスサミットも捨てがたかったが、最先端の技術を優先した。また、会場には学生と思われる若者や愛玩動物看護師と思われる方々も多くいて、この大会の幅の広さを感じさせた。

また、ホール E の企業ブースも見て回ったが、獣医療を含む幅広い領域で各社が力を入れる製品を PR するブースがところ狭しと並んでおり、知識の刷新ができるばかりでなく、緑やオレンジ、青などのカラフルなブースは見た目にも楽しい。中にはスタンプラリーの台紙を片手に全ブースの制覇をもくろむ参加者もいるようだ（景品があるらしい）。また、スポンサー名が記されたパネルがあちらこちらにあり、全体の活気を象徴していたように思う。

ありがたいことに 2 日目の夜には各大学の同窓会が企画されており、自分も参加させてもらうことにした。昼は国内外の専門的な情報収集を行いつつ、夜はこうして旧交を温めることができるのも学術大会の良さだろう。数年ぶりに会う友人たちの人生模様を聞きながら、自分の歩みを振り返り、まあ、これで良かったのだらうと思えた。全ての人に感謝したい。

後編につづく